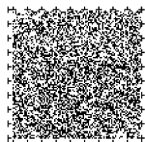


高木敏子について

高木さんの織物作品は、離れたところから、空間全体をながめたり、近くで織り目をじっくりみたり、いろいろな角度から鑑賞するのがオススメです！壁掛け作品は、よく見ると、織り目の細かさや糸の本数に違いがあり、立体作品は、糸の色が同じ色でも、淡かったり、濃い色目があったり、手作業ならではの表情の違いを見つけることができます。西陣織伝統の技を受け継ぎつつも、戦後、新しい表現にチャレンジした高木さん。糸や布など、繊維素材を使った、これらファイバー・アートの作品は、天井が高い MOT の展示室でも圧倒的な存在感を発しています。

音声コード
Uni-Voice

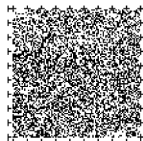


ガイドスタッフ M

河野通勢について

河野通勢は大正から昭和にかけて活躍した洋画家です。彼の育った家には元美術教師の父親が集めた西洋美術の画集や複製画がありました。河野は独学ながらそれらを模写したり、風景を写生することで、デッサンと描写を身につけました。親交のあった武者小路実篤の愛蔵品であったこの作品からは、洋の東西、時代を問わず、風俗を描き分けられる河野の自負が感じられます。女性たちの服装の装飾や春の花々が緻密に描かれていますのでご注目ください。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ Y



前本彰子 《パンドラの箱の中で》 2002

この作品は、前本さんが育児に悪戦苦闘し、「自分はDNA 運搬の器か」と悩む中制作されました。制作中、まだ就学前のお子さんたちは、この作品の中を出たり入ったりして遊んでいたといいます。心身ともに休まる暇もない毎日は、あらゆる災いを封じ込めていた（そして最後に「希望」だけが残った）という、パンドラの箱の中のような感じだったのかもしれませんが。中央に座っている、お腹に大きな傷がある母親は、堂々として神様のようにも見えます。神にすがりたいようにも、自分がこの神のようでありたいという願いのようにも思える作品です。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ K

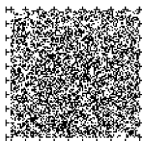


野村和弘 《eva×2》 2006-2007

足元注意！リカちゃん人形が置いてあります。2体、それもほぼハダカで。通常はない、何か描かれています。しかもズレているのがおわかりでしょうか？そしてそのズレは実は2体で微妙に異なるのですが、その差異（≡それぞれのリカちゃんの特徴）はもう1体が存在することで初めて私たちに認識されるのです。

歩くにはまずバランスを崩さなくてはいけないように、作家はこうしたアンバランスな状態から新しいものが創られると考えているそうです。このアンバランスな赤い点、ほかの作品にも登場するので、ぜひ探してみてください。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフF

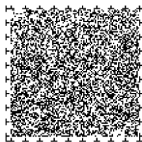


野村和弘 《テリトリー》 2022-23

鳥の群れと小さな家。一見するとおしゃれな鳥の巣箱のようにも見えますが、よくみると家に入る穴はありません。人間の住む家の屋根に、鳥たちが舞い降りてきた、そう思うと彼らが何倍も大きく見えてきませんか。

野村和弘は、既製品を組み合わせた作品で、見る人の感覚をゆさぶります。タイトル『テリトリー』は、領土や縄張りを意味します。屋根の鳥と家の住人、屋根の上の鳥同士、だけではなく、二つの鳥の群れ同士、いろんな縄張り争いがくりひろげられていそうです。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ A



アルナルド・ポモドーロ

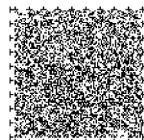
《太陽のジャイロスコープ》 1988



ガイドスタッフI

ジャイロスコープは船や飛行機の針路を定める時に使われる道具です。絶対の安定性と信頼性が求められます。作品を見てみましょう。とても力強く、合理性を感じます。でも気付きましたか。そこにある鋭い裂け目に。作者のポモドーロによれば、この裂け目は深層意識を表現しているのだそうです。合理性と深層意識が共存しています。この作品を見ると私は自分の人生を思います。岐路に立ち人生の針路を定める時には合理的な判断を心がけ、人生を送ってきたように思うのですが、そうでなかったこともあるなど。それは、それでよかったなど。

音声コード
Uni-Voice



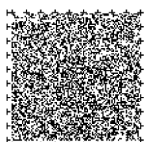
オノ・ヨーコ

《インストラクション・ペインティング》について

真っ白な余白のあるキャンバスに言葉がひとつずつ描かれています。鑑賞するには少し仰ぎ見る必要があります。切り取られたひとつひとつの言葉は、日常の会話で使われる時とは、異なるものにも思えてくるかもしれません。誰にでも開かれているようで、それは「私」だけのために向けられた言葉のようにも感じます。一つの言葉に惹かれましたか？横に並んでいる言葉と結び付けて、あなただけの詩を紡いでみましたか？

このような形式のアートはインストラクション（指示）と呼ばれますが、この作品はむしろ、私たちの心を自由に解き放ってくれるようです。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ N



鈴木昭男

《道草のすすめ - 「点音（おとだて）」 and "nozo mi"》

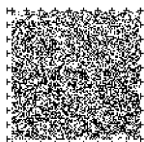
2018-19

《点音》は美術館内と敷地内に点在する12個の白くて丸いプレート。《no zo mi》は屋外展示場にある5つの階段状のもの。足とも耳とも見えるマークが目印。見つけたらたぶん乗ってみたいくなる、そんな作品です。美術館で作品に乗っていいの？ そう思われるかもしれません。が、子どもの頃、駐車場の車止めブロックのような地面から少し高いところについてみたいくなりませんでしたか？ そんな気持ちのまま、ぜひ《点音》に乗って、耳を澄ましてみてください。

12の《点音》の場所の地図もご用意しています。

手に入れて探検開始です！

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ Y

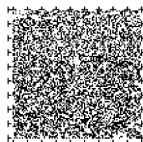


文谷有佳里 「ライブドローイングについて」

美術館のガラス面がここだけ華やか！ 2019年7月24日の公開制作で、仕上がって行く様子をお客様が直接見られるライブドローイング。一発勝負です！

黒くのびやかな線は作家の想いを乗せて高い所まで続きます。時には『そのペン書きやすいよね』などとお声もかかり、お客様との会話を楽しみながら和やかに。作品制作を通じて人とのつながりを大切にしています。私も挑戦したくなります。建築家が図面を描く様に、音楽家が作曲をする様に、描かれた作品からリズムカルなメロディーが聞こえて来るでしょう。コレクション展の入口にふさわしい作品です。

音声コード
Uni-Voice

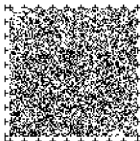


ガイドスタッフ O

アンディ・ウォーホル 《6枚組の自画像》 1966

1枚の写真を元に、シルクスクリーンという版画技法で刷られた自画像です。顔半分は影に隠れ、目の表情がはっきりわかりません。私たちに見られることを拒んでいるのか、あえて神秘的なキャラを演じているだけなのか。色違いの同じ画像が6枚組み合わせられているのはなぜ？まるで機械的にスタンプを押したよう。不気味さも感じて私には生身の人間に見えません。作家の思いが込められているという自画像のイメージから遠く、謎は深まるばかりです。作家は自分をどう見て／どう見せたかったのでしょうか？

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ N



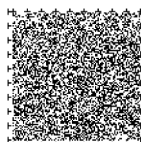
ロイ・リキテンスタイン

《ヘア・リボンの少女》 1965

《ヘアリボンの少女》を楽しむ

まずは展示室の真ん中にあるベンチのあたりに立ってみましょう。そして、右、左と移動してみましょう。どこから見ても少女の目線があなたの目線を離しません。切り取られた一瞬ながら、少女の置かれている状況や心のうちを想像してしまいます。この緊迫感はどこから生まれるのか。振り返る少女といえばフェルメールの「真珠の耳飾りの少女」。こちらと見比べてみると何かわかるかもしれません。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフY

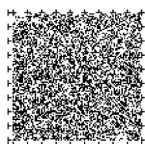


アレックス・カツ 《リンダ》 1989

この作品のような横長の紙を渡されて、「ここに顔を描いてください」と言われたらびっくりしませんか？そして、さあどうやって描こうかと悩むのではないかと思います。そんな横長画面に、「こう描くか！」という大胆な構図がとても印象的な作品です。

アレックス・カツは、家族や友人など、親しい人をモデルにして作品を描きます。プロのモデルさんだったら出せないような、心を許した人だからこそ、この自然で温かい表情。描いているカツとの関係が伝わってくるような、穏やかで明るい空気を感じます。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフK

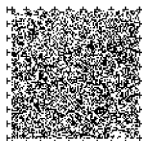


中園孔二 《無題》 2012

お姫様のような人と白い人のようなものが、薄気味悪いけれどちょっと可愛らしくも思える4体の大きなシルエットに囲まれていますね。その眼はお姫様と白い人を見つめているし、身体の部分にはさらに眼が浮かんでいます。

これはどんな場面でしょう？ 白い人はお姫様を守っているのか、それとも連れ去ろうとしているのかしら？ 絵の具が重ねられて層になったこの絵を見ていると、私たちも絵の一部としてこの緊張感のある現場を目撃しているように思えてきませんか。

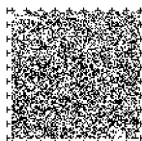
音声コード
Uni-Voice



奈良美智について

ぬいぐるみのように可愛いらしい子どもですが、睨みつけるような目が印象的な絵。作者の奈良さんは青森県出身。愛知県の美大を出たあと、約12年間ドイツで生活し、制作を続けました。こうした子どもの絵はこの時期にうまれたもの。言葉がスムーズに伝わらない環境の中、自分の作品でコミュニケーションがとれないかと、一人家にこもり制作を続けたそうです。自分自身と作品に向き合う時間が長いほど、外に出たとき、作品をみた人と会話がはずむのではないかと奈良さんは語っています。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ M

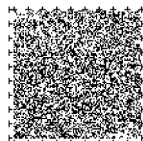
モニール・ファーマンファーマイアンの 作品について

作品の前に立ってみて下さい。室内の光を集めてキラキラと輝いています。床にも反射した光が。鏡を細かく割って組み上げたモザイクの技法で作られています。タイトルを見てみると《オクタゴン》8角形、《ヘプタゴン》7角形、《ノナゴン》9角形など幾何学を表す言葉が使われています。モザイク模様はひとつの多角形を中心にどこまでも模様を繋げていくことができます。ここにある作品はそれぞれ1つの多角形ですが、見た人の心の中でどんどん増えてキラキラしながらたくさんの人を繋いでいくと良いですね。



ガイドスタッフ H

音声コード
Uni-Voice

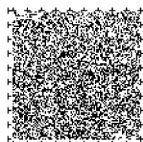


多田美波 《周波数 37306505》 1965

鏡のようにあなたの姿をとらえる半球が6つ。どれも凸凹としていて、そこに映る6人のあなたもタテヨコ様々なサイズ。そしてよく見ようと近づけば近づくほど、その歪みは強調されてしまう…。

今年生誕100年となる多田美波は、美大で絵画を専攻した後、絵具をはなれ、金属、アクリル樹脂やガラスといった、非伝統的な素材をつかった彫刻を生み出しました。この作品でも、アクリルの上にアルミニウムのメッキが施されています。幼い頃からものづくりが好きだったという多田は、こうした加工技術の開発にも意欲的に取り組みました。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフF



開発好明 《机の上》 2010

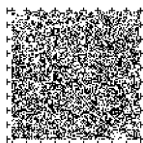
机の上から何か音が聞こえてきます。「何かあるの
だろう。」「見てみたい。」「でも見えない。」

縄ばしご、つり革がぶらさがっています。ボルダ
リングの手がかりも。「それを使えば登れるかな。」
「うーん、難しい。」

もう忘れてしまっているかもしれませんが、あなた
が赤ちゃん、幼児だったころ、大きな机を見上げて
そんなことを考えていたのかもしれませんが。

「見たくても見えない。」大人になってもそんな
ことはいろいろありそうです。「すべてのもの、
ことが見えなければいけないの？」そんなことは
ないのかもしれませんがね。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ I



デニス・オッペンハイム

《2 Stage Transfer Drawing（「ビデオ作品集」第4巻より）》

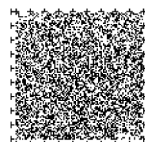
1971

画面の中の二人がしている遊びを皆さんもした事ありませんか。二人は親子で、作者のデニス・オッペンハイムと息子さんです。子どもがお父さんの背中に描いた線を、お父さんは背中を感じ（見）ながら、ゆっくりと壁に描いていく—こちらには「過去」というタイトルが、逆にお父さんが子どもの背中に線を描く方には「未来」というタイトルがつけられています。音のない画面の中に流れる濃密であたたかい親子の時間。泥の中で腕立てふせするパフォーマンス作品などびっくりな作品も生んだオッペンハイムはこんな作品も残しているんですね。



ガイドスタッフ Y

音声コード
Uni-Voice

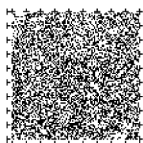


宮島 達男 《それは変化し続ける それはあらゆる
ものとの関係をつぶ それは永遠に続く》 1998

しばらく眺めてみましょう。1から9までの赤く
点滅する数字が、それぞれ違う速度で繰り返し動いて
います。0はありません。

ここから何をイメージしますか？ 生と死、人生、
人間社会、あるいは宇宙でしょうか。LED デジタル
カウンターを使ったシンプルな数字だからこそ、
感じ方はさまざま。想像が広がるのかもしれませんが。
この作品の長いタイトルは、作家が大切にしている考え方
そのものです。「それ」とは何でしょう。あなたなら
「それ」をどんな言葉に置き換えたいですか？ 広い
この空間に包まれながら、時間を忘れて考えて
みませんか。

音声コード
Uni-Voice



ガイドスタッフ N

